

平成17年度 病害虫発生予報 第1号

平成17年4月11日
発表：福島県病害虫防除所

病害虫の発生状況と発生予想（多 やや多 並 やや少・少 - 対象外）

作物名	病害虫名	発生状況 (平年比)				予想発生量 (平年比)				備考
		県北	県南	会津	浜	県北	県南	会津	浜	
水稻	イネいもち病 イネ苗立枯病 イネもみ枯細菌病、 苗立枯細菌病	-	-	-	-					
麦類	赤かび病	-	-	-	-					
リンゴ	腐らん病			-				-		
ナシ	黒斑病 黒星病	-	-	-	-	-	-	-		二十世紀

予報の根拠の中で（+）は多発要因、（-）は少発要因、（±）は並発生要因であることを示す。

発生予報と防除対策 A 普通作物

イネいもち病（育苗期）	地 方	県 北	県 南	会 津	浜通り
	発 生 量	並			

- 1 予報の根拠
例年同様、種子更新率が高く、消毒済の購入種子の利用が定着している（-）。
昨年の穂いもちの発生は平年並みであった（±）。
- 2 防除上注意すべき事項
被害稻わらやもみ殻などは伝染源となるので、育苗床への使用や、周辺への放置を避ける。
育苗温度管理および水管理はこまめに行い、過湿や過乾燥を避ける。

イネ苗立枯病 (リゾバス属菌, フジリウム属菌, ビシウム属菌, トリコテルム属菌)	地 方	県 北	県 南	会 津	浜通り
	発 生 量	やや多			

- 1 予報の根拠
本病を対象とした農薬の使用が減少している（+）。
天候予報（4月8日発表1か月予報）によると、気温は平年並、日照時間は平年並と予想されている（±）。
省力的な育苗技術の普及とともに、こまめな温度管理が十分に行われなくなっている（+）。

2 防除上注意すべき事項

発生してからの防除は困難なので、病害虫防除情報「ファピイ」を参照して予防対策に努める。

育苗期間中の極端な温度変化は発生を助長するので、緑化期以降は、昼間28以上、夜間10以下にならないよう気温の変動に応じて適切な温度管理を行う。とくに出芽時の高温はリゾプス属菌等の発生を助長するので注意する。

無加温育苗等で、保温資材による被覆が長時間にわたると、高温・過湿になりやすく、発生を助長するので注意する。

水管理はこまめに行い、過湿や過乾燥を避ける。

イネもみ枯細菌病、 苗立枯細菌病	地 方	県 北	県 南	会 津	浜通り
	発 生 量	やや多			

1 予報の根拠

例年同様、種子の更新率が高い(±)。

天候予報によると、気温は平年並と予想されている(±)。

省力的な育苗技術の普及とともに、こまめな温度管理が十分に行われなくなっている(+)。

2 防除上注意すべき事項

種子消毒時にもみ枯細菌病の防除を実施する場合は、病害虫防除情報「ファピイ」を参照する。

播種後10日頃までの高温・過湿は、二次感染を助長するので避ける。

発病苗は移植せず、廃棄処分する。

ムギ類赤かび病	地 方	県 北	県 南	会 津	浜通り
	発 生 時 期	並～やや早い			
	発 生 量	並			

1 予報の根拠

出穂期は平年並からやや早いと予想されている。

天候予報によると、降水量は平年並と予想されている(±)。

2 防除上注意すべき事項

感染時期は出穂期から開花盛期である。この時期に降雨があると発病が多くなる。薬剤散布を実施する場合は、病害虫防除情報「ファピイ」を参照する。

平成15年産から赤かび粒の混入率が0.0%を超えた麦類については、食用としては規格外に格付けされるようになった。

刈り取り後は雨にあてないように注意する。

収穫に当たっては事前に赤かび病の発生状況を把握し、被害が認められる場合は健全な麦と仕分けして、収穫・乾燥をする。

共同乾燥施設においては、荷受け時にチェックを行う。赤かび病の被害粒が確認された場合は仕分けを行い、別に乾燥する。

B 果樹

表1 生育概況(果樹試験場)

樹種	品種	発芽期(月・日)		開花始期(月・日)	
		本年	平年	予測月日	平年
リンゴ	つがる ふじ	4.3	3.29	-	4.27
		4.5	3.30	4.28	4.28
モモ	あかつき ゆうぞら	4.2	3.28	4.18	4.17
		4.5	3.29	-	4.18
ナシ	幸水 豊水	4.7	4.5	4.24	4.24
		4.6	4.2	-	4.20

注) 開花期予測法: 発育速度(DVR)モデルによる発育予測(起算日: 発芽日~)。
開花始期の予測値は、今後の気温が平年並に推移した場合。

1. 果樹の生育状況と開花予測

- (1) 発芽期の平年比は、リンゴでは「つがる」が5日、「ふじ」が6日遅い。モモでは「あかつき」が5日、「ゆうぞら」が7日遅い。ナシでは「幸水」が2日、「豊水」が4日遅い。
- (2) 展葉日は、リンゴ「ふじ」が4月8日で2日早い。
- (3) この時期の生育は、気温による影響が大きいため、今後の気温の推移により変動する可能性がある。

発生予報と防除対策

腐らん病(リンゴ)	地 方	県 北	県 南	会 津	浜通り
	発 生 量	やや多	やや多	多	-

1 予報の根拠

県北および県南地方で増加傾向にあり、枝腐らんが主であるものの、一部では胴腐らんも認められる
会津地方では他地方に比べ発病度および発生場所割合が高く、胴腐らんが主である。
会津地方など積雪の多かった地域では、雪の重みによる樹の折損が例年より多く見られ、この部位から感染する恐れがある(+)。

2 防除上注意すべき事項

薬剤のみによる防除は困難であるので耕種的防除と併せ防除する。
枝腐らんは健全部を5cm以上含めせん除し、切り口に殺菌塗布剤(トップジンMペースト、トップジンMオイルペースト、ベフラン塗布剤3)を塗布する。
胴腐らんは病患部を健全部まで含むように削り取り、殺菌塗布剤を塗布するか泥巻き法により処置する。なお、せん除しおよび削り取った罹病部は園外に持ち出し処理すること。
発生の多い場合は展葉初期にベフラン液剤25 1000倍を散布する。
損傷した樹はかすがいやボルトで早めにとめて接合を図る。

黒斑病(ナシ)	地 方	県 北	県 南	会 津	浜通り
	発 生 量	やや少		-	

1 予報の根拠

越冬病斑発病枝率は平年より低い(-)。

越冬病斑発病枝が認められた場合割合は平年並である(±)。

2 防除上注意すべき事項

耕種的防除として、越冬伝染源(感染枝・罹病芽)を除去する。

発芽1週間後、開花直前にオキシラン水和剤500倍を散布する。

黒星病(ナシ)	地 方	県 北	県 南	会 津	浜通り
	発 生 量	やや少	並	-	並

1 予報の根拠

昨年秋期の葉の発病(秋型病斑)は、県北地方では未確認であったが、県南および浜通り地方でやや多かった。このことから、第一次伝染源となる被害落葉上の子の胞子もやや多いと推定される(+)。

2 防除上注意すべき事項

薬剤による防除では、開花直前と落花直後の散布が重要である。昨年、発生の多かった場合はEBI剤を散布する。

開花期の防除間隔が開かないよう、落花を確認したら直ちに薬剤を散布する。

その他病害虫の発生動向と防除対策

せん孔細菌病(モモ)

昨年秋期の台風通過後に発生量が増加し、さらに、気温が高く降水量も多かったため、本病の越冬伝染源の密度は高いと思われる。そのため、せん孔細菌病の防除を徹底する必要があり、開花直前に4-12式ボルドー液、ICボルドー412 30倍、コサイドDF 500倍、キンセット水和剤80 1000倍のいずれかを散布する。

主要鱗翅目類(リンゴ、モモ、ナシ)

主な鱗翅目害虫の発生を三角法により予測すると、平年より1~3日程度遅れると推定される。ハマキムシ類の防除は、開花直前に訪花昆虫に影響の少ないIGR剤やBT剤を散布する。なお蚕毒規制地域では有機リン剤を使用するが、訪花昆虫への影響を考慮する。モモハモグリガ、キンモンホソガ及びナシヒメシンクイの防除適期は、5月1旬~5月2旬と推定される。

ハダニ類

リンゴハダニの越冬卵量は平年に比べやや少なかった。発芽前に機械油乳剤およびハーベストオイルを散布できなかった場合は、発芽後1週間までにハーベストオイルを100倍で散布する。

巡回調査では、ナミハダニの下草寄生量は平年に比べやや少なかった。しかし、昨年発生量が多かった場合は、樹冠下草にナミハダニの防除効果があるハービー液剤(除草剤)200倍を5月上旬までに使用する。

天候予報

向こう1か月(平成17年4月8日仙台管区気象台発表)の平均気温は平年並、降水量は平年並、日照時間は平年並の見込みです。